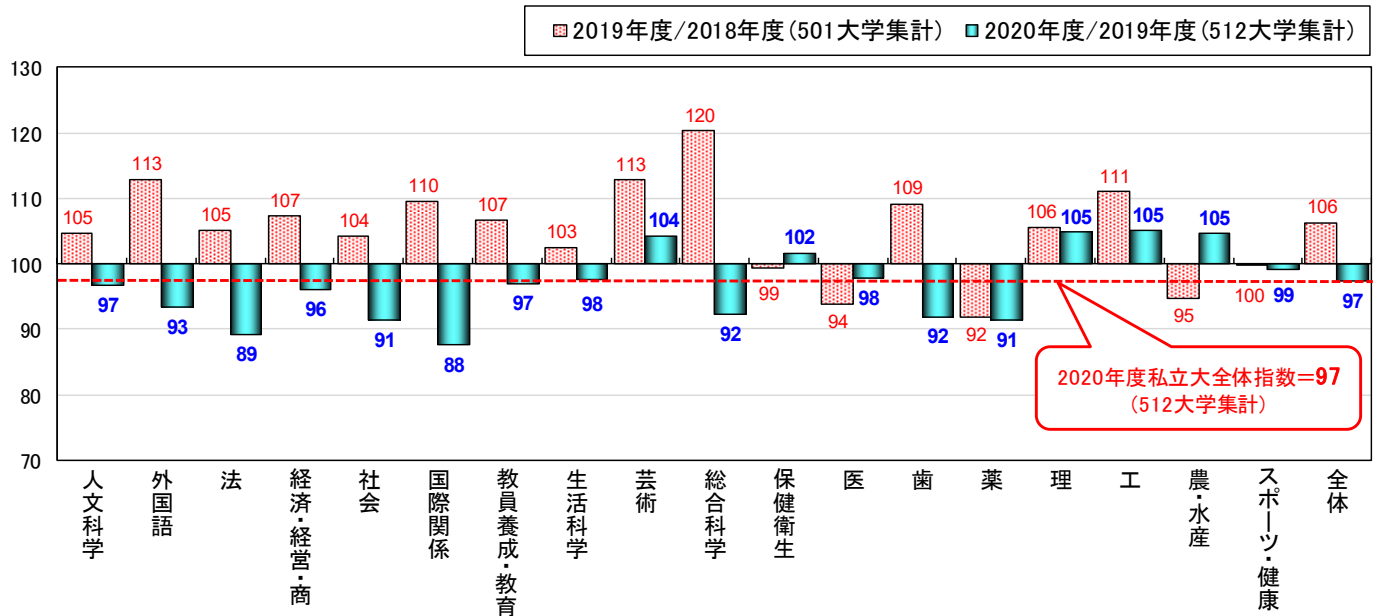


2020 年度入試状況分析【私立大】

◎系統別志願状況

□私立大志望者の人気の高い系統は文系から理・工系へ

[私立大一般選抜入試 系統別志願状況]



※前年度を100とする指数

系統別で増加したのは、理(105)、工(105)、農・水産(105)、芸術(104)、保健衛生(102)の5系統のみでした。先に触れたように、受験人口の減少、AO・推薦入試で大学進学を決定した受験生が多く一般選抜入試を目指した受験生が減少したことに加えて、一般選抜入試の中のセンター利用方式の大幅減少が影響しました。

前年度に増加率が鈍った文系の系統は、全て減少に転じており、文系の減少が全体の減少に直結しました。文系の系統の中では、国際関係(88)の減少率が最も大きくなりました。近年特に増加が顕著な系統でしたが、反動が一気に表れました。大学別では、青山学院大、津田塾大、東京女子大、東洋大、明治学院大、大阪経済法科大などの大幅減少が目立ちました。次に減少率の大きい法(89)は、駒澤大がほぼ半減し、成蹊大、成城大、専修大、東洋大、法政大、大阪経済法科大、摂南大、関西学院大などが大幅減少したことが影響しました。

前年度最も増加率の大きかった総合科学(92)も減少しました。文理のいずれからとも志願者のいる系統ですが、前年度新設の中央大・国際情報が大前年度の高倍率の反動で半減以下の大幅減少、駒澤大・グローバル・メディア・スタディーズが6割以上の激減、法政大や近畿大なども大幅減少したことが影響しました。

一方で、理(105)、工(105)はいずれもやや増加したことから、私立大志望の受験生の人気の高い系統が文系から理・工系へ移ったことがわかります。細かい専攻別でも、主要な専攻はほとんどが増加し、特に電気・電子・通信工(114)、情報科学(113)の増加が目立ちました。大学別では、千葉工業大(114)の志願者数が初めて10万人を突破したのが目立ちました。農・水産(105)はやや増加しましたが、前年度は約5%の減少だったため、人気が元に戻った状況であることがわかります。また、芸術(104)は、前年度の増加に引き続きやや増加と人気が高まっています。新しい分野として、AR(拡張現実)やVR(仮想現実)といった映像クリエイター系への社会的ニーズの拡大とこの分野への興味を持つ若い世代の増加という背景があります。

理系の中でも、メディカル系は新設が続いている保健衛生(102)を除き減少し、特に薬(91)、歯(92)の減少が目立ちました。医の入学定員増加に伴う間口拡大の影響が大きく、医の既卒受験生の減少、医から歯や薬への志望変更者の減少に加えて、理・工系と比べて系統自体への人気も低下していることも要因です。薬の大学別では、北里大、昭和大、武蔵野大、摂南大、京都薬科大、福岡大の大幅減少が目立ちました。また、保健衛生は微増でしたが、系統全体の志願者数の半数以上を占める看護(98)は減少が継続しました。

2020 年度入試状況分析【私立大】

□センター利用方式の志願者数は、文系の系統で15%以上の大幅減少が目立つ

方式別に各系統の志願状況をみると、理、工、農・水産は、一般方式、センター利用方式ともに増加しましたが、他の系統はいずれもセンター利用方式は減少し、センター利用方式の減少が私立大全体の減少につながりました。センター利用方式は、経済・経営・商(86)、人文科学(88)を除いた文系の4系統で15%以上の大幅減少でした。

また、文理別でセンター利用方式の減少数をみると、減少数の90%が文系の系統合計の減少数となりました。センター利用方式の減少要因としては、過去2年間は一般方式を上回る増加率で競争が厳しくなって、合格目標ラインが高くなったことによる敬遠傾向と、2020年度センター試験の平均点ダウンによりセンター試験後に出願可能な募集単位への出願が慎重になったことなどが考えられます。特に文系では併願時の受験料割引制度を利用して、受験料が安価で、さらに受験対策や日程的な負担が少ないセンター試験の成績のみで合否が決まる募集単位が多いセンター利用方式での併願が多くみられました。しかし、この方式への出願が大きく減少したことが全体の減少につながりました。

〔私立大一般選抜入試 系統別・方式別志願状況〕

